

シンポジウム 1

"Baby Science for the Next Decade"

司 会：友永 雅己（京都大学霊長類研究所）

発表者：乙部 貴幸（仁愛女子短期大学幼児教育学科）

長井 志江（大阪大学大学院工学研究科）

林 美里（京都大学霊長類研究所）

皆川 泰代（慶應義塾大学大学院社会学研究科）

森口 佑介（上越教育大学・科学技術振興機構さきがけ）

企画趣旨

日本赤ちゃん学会は、昨年、第10回大会として一つの区切りを迎えた。21世紀の幕開けとともに産声を上げた当学会も「幼年期の終わり」を過ぎ、次の10年に向けて歩み始めている。この10年を牽引するのは次代の若手研究者たちである。そこで、本シンポジウムでは、日本の赤ちゃん学の次代を担う5名の研究者に、今後10年の展望をそれぞれの立場から自由に発言していただくことを企図した。

保育現場と実験室のはざま：共有—発展のサイクル構築をめざして

乙部 貴幸

(仁愛女子短期大学幼児教育学科)

「役に立つ」という言葉は、多くの基礎研究者を悩ませる。学際的研究が推奨されるようになって既に久しく、実際に幅広い分野の研究者が参加している赤ちゃん学会は、この問題に多角的に取り組むことが望まれているといえる。しかし、学問的正しさと社会的ニーズに対する背反的意識は根底に残り続けていると思われる。

従来、多くの赤ちゃん研究が実験室という理想的な環境で行われてきた。それにより、統制されていない環境では気づきにくい、新しい知見が得られることも多い。しかし、それらの知見が最終的に「役に立つ」ためには、家庭や保育所といった実際に赤ちゃんが生活し、育っている環境に還元されなければならない。特に、保育所保育を受ける乳児数の増加傾向が続いており、赤ちゃん学を社会還元するための研究フィールドとしても、保育所の重要性は年々高まっている。

従来、乳児に関する科学的研究の多くは、実証可能な、個体あるいは個体内の微細な発達プロセスに焦点を当てる傾向にあった。他方、2008年に告示化された保育所保育指針では「信頼感」「情緒的な絆」「愛情」といった実証を超えた言葉で乳児の育ちが説明され、それに合わせた保育内容が示されている。長い間、実験室で得られた知見と保育現場の間には、はざまがあったといえる。

今こそ、このはざまを埋める努力が必要だと考えられる。現実として、すぐに役に立つ、魔法のような知見が簡単に得られることはない。だからこそ、まずは赤ちゃん学の現在地を保育の現場にコツコツと伝えていくことを通して、赤ちゃんに対する理解や展望を現場と共有することから始めるしかないであろう。その上で、リクルートや研究の場としての協力も得ながら現場のニーズを知り、意見を交換することで新しい研究を進める原動力とする。それらをもとに、研究を基礎・応用の両面から発展させ、また還元する。このようなサイクルが構築されることで、赤ちゃん学は、単に「役に立つ」だけでなく、より実際的な意味で赤ちゃんの発達のメカニズムに近づいていくものと思われる。

Reference

厚生労働省（2008）保育所保育指針

人とロボットの相互作用から乳幼児の発達を捉え直す

長井 志江

(大阪大学大学院工学研究科)

認知発達ロボティクス[Asada et al., 2001; 2009]が提唱されてちょうど10年, 乳幼児の認知発達を構成的に理解しようとする試みは, 本赤ちゃん学会でも広く認知されるようになった. 従来の発達心理学や脳科学での解析的手法の限界を埋めるべく, 身体をもつロボットを環境, 特に養育者としての人と相互作用させることで, 認知機能の発現のメカニズムを探るアプローチである. その相互作用から見えてきたのは, 認知発達がロボット個体内の現象として起きるのではなく, 人を巻き込んだ総体として生じるということである. 人がロボットの発達を誘導し, ロボットの発達が人の応答を形成する. 認知発達ロボティクスでも環境設計の重要性が示唆されていたが, 乳幼児と養育者の相互作用として発達を捉える研究例は少ない. 本発表では, 人とロボットのインタラクション実験から見えてきた, 相互作用としての認知発達について議論する.

マザリーズ[Snow, 1977; Fernald and Simon, 1984; Kuhl et al., 1997]やモーショニーズ[Brand et al., 2002; Rohlfing et al., 2006]に代表される養育者の対乳幼児行動は, 乳幼児の言語学習や運動学習において, 重要な役割を担うことが示唆されてきた. 養育者の発話や運動における誇張が, 時空間での信号を分節化し, 乳幼児の学習を促進する. 発表者はこれがどのような原理によって起こるのか, 特に, 乳幼児の未熟な知覚機能がどのように誘導され学習促進へとつながるのかを, 人とロボットのインタラクション実験を通して検証してきた(右図参照). ロボットに乳幼児を模したボトムアップ視覚機能を実装し, 人が自然に生成したモーショニーズとの対応関係を解析した結果, (1)人の動作誇張がロボットの未発達で反射的な視線を, 動作の分節点へとうまく誘導し[Nagai and Rohlfing, 2009], それと同時に, (2)ロボットの未熟で不安定な視線変化が, 人の動作の誇張, さらには分節化を促す[Nagai et al., 2010]ことが発見された. これらの結果は, モーショニーズと視線変化という限られたモダリティにおける相互作用であるが, その他のモダリティ, 例えばマザリーズとその知覚・応答においても, 同様の関係が見いだされるであろう. 認知発達ロボティクスは, 設計対象であるロボットと人の相互作用の解析を通して, 養育者の役割を乳幼児の視点に立って理解し, 認知発達を新たな視点から捉え直すことを提案する.



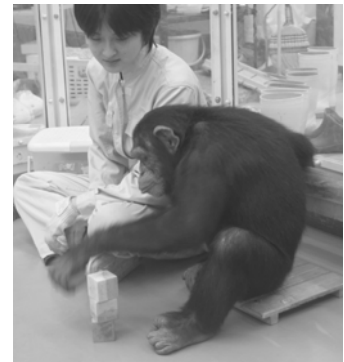
赤ちゃん学の展開：比較認知発達の見点から

林 美里

(京都大学霊長類研究所)

ヒトは、なぜ人へと成長するのか。ヒトという存在の本質は何なのか。「赤ちゃん学」と「比較認知科学」は、ともに、これら究極の問いに答えるためのアプローチだ。赤ちゃん学は、うまれたばかりのヒトが、どのような能力や特性をもち、どのように発達していくのかを調べる学問といえる。比較認知科学は、ヒトと、ヒト以外の動物を比べることで、ヒトの心の進化的な基盤を明らかにするというアプローチだ。これら二つの視点を融合してできたのが、「比較認知発達」という研究分野だ。京都大学霊長類研究所では、2000年に誕生した3組のチンパンジー母子を対象に、参与観察の手法を用いて比較認知発達研究を継続してきた。チンパンジーの子どもと母親の様子を、研究者が間近で観察することによって、チンパンジーの子育てや発達の過程について多くの知見を得ることができた。ヒトの発達研究でよく用いられる、対面検査の手法でチンパンジーの認知発達を調べることも可能になった。従来、ヒトの発達の特徴とされていたことがチンパンジーでも観察されるなど、多くの類似点がある一方で、社会的な文脈が付与された場合などにヒトとチンパンジーの差異がみられることがわかってきた。

小さな赤ちゃんだったチンパンジーも、10歳をすぎておとなたちとそれほど変わらない体格になった。母親とのきずなはまだ強いが、群れの他のメンバーとの社会的交渉も独力でおこなうようになった。赤ちゃんの時期から、性成熟をへて、おとなのなかまいりをするまでの、チンパンジーにおける長期的な発達の課程をつぶさに観察することができた。これまでの10年は、ヒトと直接比較可能な形で、チンパンジーの赤ちゃんの発達過程を追ってきた時期といえる。



次の10年の展開はどうなるだろう。今までに明らかになってきた、チンパンジーの認知発達とそれをはぐくむ母子関係に加えて、母子をとりまく社会全体にも目を向けた研究が必要なのではないか。広い意味での母子サポートが、チンパンジーの社会の中でどのようにおこなわれているのか。ボソウの野生チンパンジーにみられる祖母による育児支援や、飼育下でみられる非血縁個体による子守り行動などについて、さらなる知見の蓄積と体系的な検証が必要になるだろう。チンパンジーもふくめて飼育下の大型類人猿では、出産しても、約半数の割合で適切な養育ができない母親がいる。健康上の理由やヒトの側の都合で、そもそも母親が子育てをする機会をうばってしまい、ヒトが母親代わりになって育てることもあった。進化的にヒトに近い大型類人猿にとって、母親が存在することは、身体的な発達だけでなく心の発達をも支える基盤になっている。母親が自分の子どもを育てることを、どのように周囲がサポートしていけるのか。ヒトの子育てにも何らかの視点を投げかけることができるような、あたたかい研究が進む10年になることを期待している。

学際性で広げる未来の赤ちゃん研究：発達脳科学・心理学の立場から

皆川 泰代

(慶應義塾大学大学院社会学研究科)

赤ちゃん学会設立より 10 年が経過し、本学会はまた次の 10 年を歩もうとしている。この 10 年で私たち赤ちゃん研究者は何を目標に、どのような方向性で研究を進めてゆけば良いのであろうか。本発表は、この問いを考える上で場合によっては「学際性」が効果的なキーワードになる可能性があることを示し、赤ちゃん学研究者が各々の研究展望を考えるためのほんの一助としたい。

まず前半では、発達脳科学や行動科学研究が過去約 10 年の間に何を明らかにしてきたかということを発表者の研究領域を中心として概観する。特に発達脳科学はこの 10 年間に成人の脳機能研究の進歩と共に目覚ましい進展をみせており、脳波計や NIRS (Near-infrared Spectroscopy) ばかりでなく fMRI (functional Magnetic Resonance Imaging) を用いて乳児の認知脳科学的知見、脳の解剖学的構造およびそれらの発達変化について解明されてきた。その具体例としてここでは乳児の音声獲得を中心とする認知脳科学研究の 10 年の成果を紹介する(1)。脳科学ばかりでなく乳児の行動科学的研究も新しいタイプのアイカメラを始めとする、新たな研究手法で、より詳細な解析が可能になり、これまでには得られなかった知見が見出されてきた。そのような新しい研究の流れを実際の研究報告を紹介しながら概観する。

これら発達脳科学および発達心理学研究の流れを踏まえ、後半ではこれらの研究を今後どのように進展させてゆくかという展望を述べ、これらの更なる発展のために、あるいはこれらの知見を応用するために、隣接領域ばかりでなく分野を超えた学際的アプローチが有用であることを述べる。学際性は研究の質、量を高めるが、それは研究の枠組み内にとどまらない。「研究」と「現場」をつなぐ学際性も重要である。「研究」を臨床や子育て、療育といった実際の「現場」へ役立てるためのアプローチがお互いの利益になり、相乗効果をもたらす可能性があることを、発表者の大学における文学部と医学部研究チームの取り組んでいるプロジェクトの事例あるいは展望を紹介しつつ、示す予定である。

文献

- (1) Minagawa-Kawai, Y., Cristià, A., Dupoux, E. “Cerebral lateralization and early speech acquisition: a developmental scenario.” *Journal of Developmental Cognitive Neuroscience*. In Press.

「有能な赤ちゃん」の先にあるもの

森口 佑介

(上越教育大学・科学技術振興機構さきがけ)

現代の発達心理学では、赤ちゃんの有能さを強調する「有能な赤ちゃん」観が支配的である。この赤ちゃんに対する見方は、過去の研究者たちが実証的な知見に基づかずに赤ちゃんを「無能」だと評していたことへの反発から、主に実験的な手法を用いて赤ちゃんが秘める認知能力や知的能力を明らかにしてきたことによる。このような知見は数多く蓄積され、赤ちゃんが見た目以上に多くの能力を有していることについては疑いがない。しかし、ここでの「有能さ」とは、成人が持ち合わせている能力と同じ能力もしくはその先駆体を赤ちゃんが有しているという意味に過ぎない。言い換えると、成人の研究に基づいて赤ちゃんの能力を評価し、それらの能力が個体発生の中でどれだけ早く出現するのかの発見を競っているのが現状だと言える。

そこで本講演では、次世代の赤ちゃん学の研究に向けて、このような「有能な赤ちゃん」観の先にある、新しい赤ちゃん観の可能性について議論してみたい。発達認知神経科学者の **Mark Johnson** によると、研究が著しく進歩するためには、1)理論的進展、2)それを支える実証的知見の発見、3)研究の方法論の進展、が必要であるという。本講演では、この枠組みに準拠して新しい赤ちゃん観の可能性を議論する。まず、1)については、その候補はいくつかあると考えられる。その中でも講演者は特に、近年の進化発達心理学や神経科学の理論的示唆を踏まえて、赤ちゃんの知覚世界や認知的世界は、少なくとも一部では成人のものとは異なるという、新しい赤ちゃん観を提唱できると考えている。2)については、実証的な知見は多くないものの、近年、知覚研究を中心に、新しい赤ちゃん観を支持する知見が報告されつつある。例えば、サルの顔の弁別能力、絶対音感、共感覚などのように、赤ちゃんは一般的な成人が持たない能力を持つ可能性が指摘されている。3)については、これまでの心理学的な実験や観察方法に加えて、近年進展の著しい認知神経科学的手法や脳情報解読技術などの手法の適用が挙げられる。以上の3点はいずれもまだ確立しているとは言えず、今後、新しい赤ちゃん観を議論するためにこれらの点を検証する必要があるということを提案したい。

シンポジウム 2

赤ちゃん・赤ちゃん家庭支援： 発達初期の支援を考える

司 会：水野 友有（中部学院大学子ども学部）

発表者：中川 信子（子どもの発達支援を考える ST の会、一般社団法人サポート狛江）

林 陽子（中部学院大学子ども学部、子ども家庭センター）

広瀬 明美（各務原市健康福祉部子育て支援課）

別府 哲 （岐阜大学教育学部）

企画趣旨

「赤ちゃんを中心とした赤ちゃん学」という日本赤ちゃん学会のテーマは、赤ちゃんやその家族を支える上でも非常に重要な視点である。また、赤ちゃんを総合的に捉え、多職種連携のもと多面的にサポートすることは必要不可欠である。そこで、本シンポジウムでは、発達初期の子ども、つまり赤ちゃんの支援やその家族の支援に携わってきた4名をスピーカーとし、研究・臨床・行政の立場から実際の取り組みや今後の構想など自由に発言していただく。赤ちゃんやその家庭を支えるための社会資源の充実を目指し、今後の赤ちゃん支援、赤ちゃん家庭支援の在り方について考える場としたい。

赤ちゃん・赤ちゃん家庭支援—発達初期の支援を考える

中川信子（言語聴覚士）

（子どもの発達支援を考える ST の会 代表、一般社団法人サポート狛江 代表）

私は、「ことばの発達」「コミュニケーション」を糸口に、非常勤の言語聴覚士として市内の各所に出入りしています。市内の子ども家庭支援センターに集う乳幼児ママたちとの出会いを皮切りに、1歳6か月健診後のフォロー教室や相談、幼児期の早期療育、保育園や幼稚園、小中学校の特別支援教育巡回、教員研修、地域の支援者の集まり、いろいろな場でいろいろな年齢層の人たちにお会いします。と同時に、長い時間経過の中での子どもの育ちを、つかず離れずでフォローできるという恵まれた立場にもいます。

一緒に仕事をしている保健師さんから聞いた「お手上げママ」の話は印象的でした。こんにちは赤ちゃん事業でおうちを訪問したとき、お母さんはベビーベッドの横で文字通り「お手上げ」していたというのです。「ミルクも飲ませたし、オムツも替えたし、服も調べたけど、泣きやまないんです！！」と。「抱っこしてあやしてみる」という選択肢がまだ、持てずにいたのですね。

育児の伝承が途切れ、見よう見まねで体得していくほかない子育てはとても難しいものになってしまい、また、周囲からの手助けも得にくくなりました。

こんな時代にあって親にとっての「楽しい子育て」、子どもにとっての「健やかな育ち」を保障するために、母子保健の分野では何ができるのか、どういふしかけが必要なのか、そして「地域」ではどんなことが可能なのか、そして、支援の必要な子を「地域」で見守ってゆく仕組みづくりとは？

小さな町で考え、仲間と共にトライしてきたことをお話しします。

子ども家庭支援センター「ラ・ルーラ」が目指すもの

林 陽子

(中部学院大学子ども学部教授、子ども家庭センター長)

1. 子ども家庭支援センター「ラ・ルーラ」の理念

中部学院大学各務原キャンパスには、子ども家庭支援センター「ラ・ルーラ」があります。開設して5年余が経ち、33,000人以上の親子に利用されてきました。ラ・ルーラの理念は、「子育てを考える拠点として、保護者が子どもとともに活動したり、地域の子どもたちやその保護者、子育て支援に関わる人々が交流でき、『共育』できる場」です。この交流と共育の場には、多くの学生も参画しています。

2. ラ・ルーラの事業内容

ラ・ルーラでは、次のような事業を展開しています。

- (1) 親子の居場所の提供
- (2) 親子で楽しく遊び学ぶプログラムの提供
- (3) 子育ての相談に応じる
- (4) 学生が実体験をとおして学ぶ
- (5) 次代における子育て・家庭支援の先駆的なあり方を模索する
- (6) 保育者の交流と研修

3. 具体的な実施プログラム

- (1) 親子の新たな出会いと相互交流
- (2) 通常業務内での特別活動：季節に応じたコーナー遊びの環境設定と保育
- (3) 情報の提供：ラ・ルーラ通信の発行
- (4) 子育て実践プログラム：子育てに関する講演および演習
- (5) 親子サロンの開設
 - ①子育てサロン：毎月1回、0歳～5歳児
 - ②げんきサロン：毎月1回、2～3歳児対象
 - ③作って遊ぼう：毎月1回、3～5歳児対象
 - ④赤ちゃんサロン：毎月1回、0歳児と母親対象
 - ⑤誕生会：毎月1回
- (6)お母さんのリフレッシュタイム
- (7) 多世代交流：高校生や高齢者
- (8) 各種行事の実施：運動会・お父さんと遊ぼう 等

4. ラ・ルーラでの支援

上記のように、ラ・ルーラでは多くの事業が展開されていますが、もっとも大切にしているのは「自分から」「仲間と」「一人でも」ということです。子育てという営みは「育つ主体である子ども」と「それを支え導く親」と「親を支える支援者」の育ち合いの過程でもあります。育児の喜びや悩みや不安を分かりあえる誰かがいる、育児に疲れたらリフレッシュできる、様々な視点から我が子を眺めてみる、そして、必要な時には専門家にも支えてもらいながら親として育っていける、そんな支援のあり方を模索しています。

つながって育てあう各務原市

広瀬 明美

(各務原市健康福祉部子育て支援課長)

アフリカには、「子どもを一人育てるには、村中の人が必要」ということわざがあります。1950年代までの日本の子どもは、まさに「村中の人」と関わりながら育っていたと言えるのではないのでしょうか。

「ご近所づきあい」という言葉も薄くなりつつある昨今、各務原市では、「子育てをみんなで支えあうまち ～親子の絆と笑顔のために～」という理念を掲げ、また、テーマを『つながって育てあう各務原市』とし、『つながる』をキーワードに、子育て家庭が、①地域とつながる ②子どもと子ども・親と親がつながる ③必要な情報が必要な人とつながる ④より安心な子育て支援サービスとつながることを重点に、子育て支援事業を整理しています。

子どもに関わる183事業のうち、乳幼児対象で、特に力を入れている事業を2つ紹介します。

①「こんにちは赤ちゃん訪問事業」では、育児経験がある地域の先輩ママさんが、おめでとうの気持ちと、子育て支援情報・おもちゃをプレゼントします。

おばあちゃんのように身近なスタッフさんから、おめでとうと言われるうれしさと、気さくにいっぱい話せる安心感、ママ友との出会いの場である子ども館等の情報提供による育児の楽しみ方の伝達など、赤ちゃんの家庭と地域・行政のつながりの一歩となっています。

②市民の方が地域の場所で、子育て親子とお茶を飲んだり、おしゃべりを楽しむ「親子サロン運営支援事業」では、子育ての負担感の軽減や地域とのつながりを濃くする目的があり、現在6ヶ所で実施されています。

子育て支援は、行政主導の事業だけでは、心の通うきめ細かな親支援とは言えません。家庭と地域、行政が一体となり、協働という考え方のもとに、誰もが互いに喜びを感じるまち創りを推進してまいります。

乳幼児期における自閉症児の社会性発達と支援

別府 哲

(岐阜大学教育学部)

1. 障害独自のプロセスと質を持った社会性の形成

自閉症は生得的な脳の機能障害を原因とするものであり、他者とさまざまな関わりをもつ際に必要とされる能力である社会性の障害がその一つのあらわれと考えられている。しかし、近年の発達研究による知見は、自閉症児の社会性障害が生得的であるが、不変ではなく、独自のプロセスと内容をもちつつ発達的に形成可能であることを示唆してきた。例えば、別府・野村(2005)は、他者信念を理解した行動はとれるがその理由を言語化できない直観的心理化と、理由の言語化も可能である命題的心理化の2つのレベルがあり、定型発達児はこの順序で心の理解を発達させるのに対し、高機能自閉症児は直観的心理化の弱さを抱えたまま命題的心理化を形成するという独自のプロセスを指摘した。このような独自の発達プロセスと内容を持った社会性の形成は、近年、他者の情動理解や自他関係理解でも指摘されてきている。

2. 発達研究からみえる保育・療育への示唆

この直観的心理化に代表される、言語化できないが他者の心や情動・自他関係を理解した行動をとるといった社会性は、定型発達児の場合、発達初期からさまざまな形でみられる。そしてそれは、他者との共有経験を保障することで新たな社会性を生み出す土台となると考えられる。そう仮定すれば、自閉症児の療育においては、“共有経験”を作り出すところに重きを置くことが重要な目標となる。他方、感覚過敏などの自閉症の特徴は、工夫された意図的療育を行わないと“共有経験”が作りにくい障害独自の課題を示している。事例も交えてこういった点を論じることとする。

公開シンポジウム

子育ての多様性を訪ねて —チンパンジーからヒト、そして人へ—

講演者：松沢哲郎（京都大学霊長類研究所）

「チンパンジーとボノボから見たヒトの子育て」

根ヶ山光一（早稲田大学人間科学学術院）

「サルとヒトの子育てをつなぐ：＜子別れ＞の観点から

小長谷有紀（国立民族学博物館）

「ヒトの子育てにみる多様性」

総合討論

企画趣旨

わが子を育てる、それはわたしたち人間のみならず、この地球に生きる多くの生き物にとって大切な営みです。私たちの子育ても、ある部分は進化の隣人であるチンパンジーやサルと共通の基盤を持っています。その一方で、ヒトの子育ては、社会・歴史・文化といった時空間の中で、驚くべき多様性を育んできました。この公開シンポジウムでは、霊長類からヒト、そして生物学的なヒトから社会・歴史・文化的存在としての人へいたる「子育ての多様性」の旅に、皆さんを誘いたいと思います。

チンパンジーとボノボからみた人間の子育て

松沢 哲郎

(京都大学霊長類研究所)

人間の体が進化の産物であるのと同様に、人間の心も進化の産物である。そうであれば、人間の親子関係も子育ても教育も、みな進化の産物である。とはいえ、骨や歯は化石として残るが、親子関係や子育ては化石としては残らない。そこで、共通祖先から分かれた人間以外の動物の子育てを知ることがたいせつだ。共通するものは祖先から受け継いだものであり、違う部分はそれぞれの進化の過程で生み出されたと考えられるからだ。

人間とそれ以外の動物を比較するとき、ごく近縁なものと比較する視点と、遠く離れたものと比較する視点がある。わたしのばあいは、人間にもっとも近縁なチンパンジーを対象にしている。チンパンジーには、ボノボという同じパン属の別種がいる。ちょうどホモ属のサピエンス人とネアンデルタール人の関係だ。チンパンジーとボノボ（あわせて広義のチンパンジー）を研究対象に、人間の親子関係と子育ての進化を考えたい。

日々の暮らしのなかで、ふだん何気なく見過ごされがちな風景がある。子どもを抱いた母親の姿を想像してみよう。そこに、父親がいる。孫の世話をするおばあさんがいる。赤ん坊には、2-3歳上の兄姉がいる。あるいは年子のこともあるだろう。叔母や親せきの者が子どもの世話をしたり、あるいは親しいご近所が手助けする。これらすべてがチンパンジーに無い。あたりまえのように思うことが、じつは人間に特有な子育てのしかたなのである。ということが、チンパンジーやボノボの研究から見えてきた。

母親が子どもの顔を覗き込んであやす、眼と眼があってにっこりとほほ笑みあう。がらがらを顔の前で振る。イナイイナイバアをする。あかんぼうが声をたてて笑う。生後半年もすると、子どもに離乳食を与える。まだお乳はでるのだが、離乳させる。次の子どもを産んで、手のかかる乳幼児を2人も3人も同時に育てる。これもごくふつうの姿だが、人間しかしない、人間を特徴づけるふるまいだ。

そもそも「親が子どもを育てる」のはあたりまえだと思うだろう。しかし、この地球上に生息する数百万とも数千万とも呼ばれる生物のありようを眺めてみると、親子関係の基本は「親は子どもを育てない」である。鮭はいくらを育てないし、蛙もおたまじゃくしの面倒をみない。わずかな例外はあるが、魚類や両生類は卵を産みっぱなしで、それが親子関係の基本だといえる。鳥は卵を温め、ひなに餌を運ぶ。哺乳類は乳で子を育てる。約38億年前、地球に生命が誕生した。長い間、子育ての基本は産みっぱなしだった。しかし、約3億年前に、哺乳類と鳥類と一部の恐竜の共通祖先にあたる生物が、親が子どもに投資を始めたのである。

人間を含めたサルの仲間、すなわち霊長類の子育ての特徴は、子どもは親にしがみつき、親が子を抱くことにある。手がある哺乳類だからである。四肢の末端でつかむ。しかし、人間の母子は離れていることが基本だ。あかんぼうは仰向けの姿勢で安定している。直立2足歩行ではなく、仰向けの姿勢が人間を進化させた。豊かな対面コミュニケーション、声を交わす、手で物を操る、すべて赤ん坊の時期から始まる。近縁なチンパンジーとの比較を通じて見えてきた、人間の親子関係と子育ての特徴について私見を述べたい。

サルとヒトの子育てをつなぐ：＜子別れ＞の観点から

根ヶ山 光一

(早稲田大学人間科学学術院)

哺乳類が子どもを育てる際、そこには心理的な要因だけでなく、「妊娠」「哺乳」といった身体的要因も関与する。霊長類の場合には一般に「抱き・しがみつき」という特徴的な行動が伴われる。その行動は、身体と心理の両要因の重なったところに、親と子がともに主体的に関与して、成立するものである。そしてやがて親子の間に母親の身体資源授受を巡る対立が生じ、その反発性をテコにして子どもが自立し、結果として親も子育ての負担が軽減される。ただし、その子別れの過程には大きな種差が見られる。

ヒトの赤ん坊は生まれてしばらく行動的に未熟な状態であって、一見すると子どもの主体性が見えにくくなっている。ヒトの母子は他の霊長類に比べ、その子どもの行動的未熟性ゆえに分離する契機が多い。その分離は、母子の間にモノ（育児具や玩具など）・ヒト（父親や祖父母など）・シクミ（保育園や病院など）が社会・文化的インターフェイスとして介在することによって安定的に実現されており、その介在がまた母子の身体関係を再帰的に枠づけもする。その状況下では、子どもの主体性は「泣き」という反発性によって発露される。

ヒトにおいて特別に発達した社会文化的インターフェイスは、具体的には重層的なシステムとして、複合アロマザリングという育児ネットワークの形をとって機能している。そのネットワークは高度に社会的な組織構造の様相を呈しているものの、その成立の根幹には実は子どもの能動性の貢献が大である。子ども、特にその身体はきわめて要求的存在であり、食にしる排泄にしる睡眠にしる、身体的不快の除去のために待たない切迫した要求を大人に突きつけてくる。そのとき「泣き」は抗しがたい訴求力として働き、それと適合せざるをえないシステムを大人に組み上げさせる。子育てはその子どもからの訴えにつきあい、親と子の主体性を時々刻々馴染ませようとする営みなのである。

都会生活は、「個」がシステムの一環として存在しつつも、表面的には独力で生きうるという幻想を与えるところに、その一つの特徴がある。そのような生活感覚は子どもからの訴求力やネットワークとは矛盾するものであり、それが子育ての困難を招くこともありうるだろう。その点からは、より子どもの身体性・主体性に近いところで行われている子育てのあり方に学ぶところも多い。シンポジウムではこのことについて、沖縄の離島における子育てから考察したい。

ヒトの子育てにみる多様性

小長谷 有紀

(国立民族学博物館)

類人猿と比べれば、人間は生物としてあくまでも一種類であり、その成長過程は一定であるといっても過言ではないだろう。しかし、人間集団は多様な文化をもっており、また時代に応じて制度も変化しているから、子育てのあり方は一様ではない。

たとえば、日本のことだけを考えても、産み方も育て方も変化した。産屋で座って出産する様式に代わって、病院で寝て出産する様式が一般化した。養子縁組が頻繁におこなわれていたことは忘れ去られ、現在では制度上、容易ではなくなっている。大勢の兄弟姉妹がいて、そこから学ぶ子どもたちは、もはやほとんど存在しない。

このように、わたしたち自身の昔の子育てが「異文化」と呼んでもいいほど現在とは異なっている。だとすれば、未来の子育ても、現在からすっかり変わっても不思議ではあるまい。子育て専用プログラミングされたアンドロイドが、良い子を育てるべく、商品化されるようになっているかもしれない……。

過去から未来までの多様性を想像するに先立ち、現代社会における子育ての多様性を文化の多様性に見いだしておこう。

わたし自身はこれまで主として中国内蒙古自治区およびモンゴル国でホームステイをして人と家畜の関係について調査をしてきた。子育てに焦点をあてていたわけではないが、つねに子育てを目撃してきた。そのため、わたし自身が子育てをするようになったとき、無意識のうちに、彼らの子育てを教科書の一つにしていたように思われる。文化的な多様性を考察する糸口として、まず、モンゴルでの子育てを紹介しよう。

現代では草原でも中心地に小さな病院があり、あらかじめ入院して病院で出産する。子どもが生まれると、ヒツジの肉をゆでて祝い、その肉汁を産後の栄養源とし、子どもに塗りつけて祝福する。赤ん坊は、布でぐるぐると巻いて荷物のように梱包される。これは、赤ん坊に不安を感じさせず、泣き止ませる方法だと、日本でも紹介されたことがある。が、まったく普及しなかった。

名前はかつては「名無し」とか「何だっけいいだろ」とか悪い名をつけた。また、男の子は女の子のように育てた。医療体制が不十分だった時代、邪悪なものを退散させる特効薬だったのである。現在でもその風習は消えていない。子どもの頭をなぜないのは、そこが神の祝福を受ける場所だからである。褒めるときは「悪い子、悪い子」と連発して思いっきり頬ずりする。ことばは嘘の道具であって真実を表現するならスキンシップに限る。

子どもが生まれてから結婚するという順番は普通だ。若い頃に産んで、やがて離婚し、子連れで再婚すると、両親の異なる兄弟がいる。生物的な親と育ての親が違うのはごく当たり前である。産みたくてもなかなか産めない女性は、養子をもって妊娠を待った。養子が実子をもたらすと信じられた。現代では、他人の子どもの面倒を率先してみたがる、という習慣として定着している。総じて、子どもは社会の財産となっているように見える。